

評・宇野 重規 (政治学者
東京大教授)

2013.7.7
読売新聞

参院選が公示され、いよいよ選挙戦が始まった。今後しばらく、ひたすら名前を連呼する選挙カーとつきあうことを考えると、気が重くなる。世界的に見てもかなりの奇観だと思っただが、どれほどの効果があるのだろうか……

などと毒づいていたら、今度は選挙ポスターについての興味深い研究書が出版された。選挙ポスターについても批判は多い。その多くは候補者がにっこり笑って、あとは口当たりのいい言葉が並ぶだけ。かなりの費用をかけているはずだが、その割に中身がないという声も多い。

本書は、このような選挙ポスターの起源を探るため、昭和3年(1928年)に遡る歴史研究である。この年、日本における初めての男子普通選挙が行われた。有権者の数が急増したこの選挙は、同時に戸別訪問が禁止されて初の選挙でもあった。

そこで注目されたのが、選挙ポスターである。これからの選挙は、言論と文書を通じて戦わなければならぬ。ポスターに込められた期待も大きかったようである。

実際、本書に収録された多数のポスターは写真Ⅱをみていると、とても生き生きしている。

モダニズムあり風刺あり



1928年立憲大新
大と敬大
慶大と敬大
しよきよ
いまに『原敬』、(共著)
ま書に『憲政友会』、(共著)
たま書に『憲政友会』、(共著)
59年生まれ。著書『憲政友会』、(共著)
授。著書『憲政友会』、(共著)
人

第一回普選と選挙ポスター

玉井清著

慶応義塾大学出版会 6600円

モダニズム調のデザインあり、風刺漫画あり、はたまた親切に投票の仕方を説明したものである。見ていて楽しいし、どうにか普通選挙を盛り上げようという意欲が感じられる。

とはいえ、問題もまたここから始まっているようだ。選挙戦が終盤に向かうにつれ、ポスターはひたすら候補者の名前を大書するだけのものになった。政策はどこへやら、有権者の情に訴えるのも、このとき以来である。何より費用がかかった。供託金導入と合わせ、選挙は人々から遠いものとなってしまった。

その意味では、今度の選挙ではポスターに注目してみてもいいだろう。はたして、そこにどれだけ候補者の政策や理念が込められているか。選挙とは何かを考えるのにふさわしい一冊。